

優秀賞

救世主にならないように

International School of Düsseldorf 3年 広谷 美咲

ウガンダの病院でボランティア活動をしていたアメリカ人の女性が治療を受けた男の子のお母さんに起訴されたというニュースを見たとき、何がほんとうの途上国支援なのか分からなくなってしまった。

5歳以下の子供の三人に一人が栄養失調を患っている。リベリアという国の存在を知ったのは、飢餓問題についてのプロジェクトをやらぬかと友達に誘われた時だ。私たちは六人のメンバーで、一年間「Zero Hunger Liberia」という活動をした。リベリアで生産できる食材で栄養価の高いバーのレシピ作りをして、SDGsの二番目のゴール「飢餓を失くそう」に取り組むことが私たちの目標だった。ただ、白人女性のニュースを見て私は思った。この活動は本当にリベリアの人に求められるものだったのか。

「White Savior」、「白人の救世主」は、欧米諸国から支援のためにアフリカにやってきて救世主になろうとする人や、自己の欲求を満たそうとする人を批判する言葉である。冒頭に述べた2019年の裁判によって「白人の救世主はいらない」という運動がSNSを中心に巻き起こったのだ。この問題は、アフリカの歴史的背景による白人への反発感情からきているといえる。欧州の支配下にあったアフリカから多くの人たちが奴隷としてカリブ海諸島や南米につれていかれ、大規模農場での強制労働を強いられた。その結果、アフリカの国々は若い労働力を欧米の国に搾取され、自国の発展をすることができなかった。現代社会において、欧米の人がアフリカの人に物資を与える様子や救いの手を差し伸べる様子は、皮肉にも昔と変わらない二カ国の力関係を象徴している。私自身も、栄養価の高いバーという物資を与える中で、一方的な支援をしようとしていたのではないか。私たち先進国が物資や人を送ってアフリカの発展を願うのは間違っているのか。

しかし、アフリカには先進国からの物資があれば、救える命があるのも事実である。また、国々が継続的な発展をする上で他国とのつながりは必要不可欠である。近年のソーシャルメディアの発達には多様な人々に発言の自由を与える反面、批判や否定をすることが容易になってしまったように思う。このような批判によって、人々が発展途上国への援助を行いにくくなってはならない。

「白人の救世主」にならないよう、自分達の活動に2つの要素を付け足した。まず一つ目は、リベリアの人が主導するものにすること。支援者が非支援者に何かを与えるのではなく、互いが対等な立場で行う、双方向の活動にするためだ。地元の食材を使うことで国内でのバーの生産が可能になり、雇用も生み出せるのではないかと考えた。二つ目は、ステレオタイプを排除すること。貧困と飢餓といった問題で人々が苦しんでいるという典型的なアフリカの姿だけでなく、多方面からリベリアについてリサーチをした。すると、海に面していて魚がよく食べられていることや、女性の大統領がいたことなどを知ることができた。また、農業が国のGDPの38%を占め、国内の雇用の70%をなす重要な産業であるという自分のプロジェクトについての新たな側面も見つけることができた。偏見を排除して相手の国を知ることから、対等な文化交流、相手への敬意が生まれると感じた。

最後に、私の中で何が本当の途上国支援なのか明確な答えは出ていない。ただ、今のアフリカや他地域には、全員ではなくとも、食糧や綺麗な水、ワクチンを必要としている人がいる。そんな人々への物資での支援を続けながら、発展途上の国にとって一番持続的な発展につながるような支援をすることが重要だと思う。国々が発展していく中で、支援の形も変わっていく必要があるだろう。その都度、何がベストかを支援対象と支援者、お互いが考え合えるような支援活動を目指したい。